

創立15周年記念

日本表面科学会の歴史

庶務一扇のカナメ

宮崎 榮三

東京工業大学理学部

〒152 東京都目黒区大岡山 2-12-1

(1994年10月20日受理)

The Rivet

Eizo MIYAZAKI

Department of Chemistry, Tokyo Institute of
Technology

Ookayama, Meguro-ku, Tokyo 152

(Received October 20, 1994)

役員すべてがボランティアである小・中規模の学会では庶務(事務局)は、いわば「扇のカナメ」であります。これがゆるんだり、はずれたりするとたちまち学会組織に支障をきたし、運営が停滞してしまう。正直申して、ここ4~5年、このカナメがやっとしっかりしてきたと思われまふ。ここに至るまでには歴代会長はじめ役員、特に庶務理事の並々ならぬ努力があり、また、団体会員を含む会員諸氏の陰に陽に支持がなされました。

学会が設立されてしばらくの間の苦しみはすでに10周年記念号に種々のエピソードとして記されていますが、ここに新たに、会誌3号目(1981年3月, Vol.2, No.1)の編集後記の一部を転載いたします。

『(中略)現在の事務局は文京区向丘1-20-89の木屋ビルにありますが、事務局員が常時いることは無理な状態です。あれやこれやで開業早々本学会は多難です。しかし、厳しい環境にあることも仕事が発展することとは直接には関係ないともいわれます。故朝永振一郎先生の業績の主なもの授業中に赤ちゃんのおしめをとりかえに行くというような時期の仕事であったということをかいたことがあります。真偽のほどは明らかではありませんが大いにうなづかめとはなりません。』

当時5畳ほどのスペースに大角さん(庶務、会計担当)、高沢さん(編集)の2人が同居していたので、委員会、役員会はおおむね他の場所(東大、東工大、都立大など)で行われていました。講演大会、基礎講座、セミナーなどが定期的に開催されるようになると、事務局のス

ペースはいよいよよせまくなってきました。1983年2月に2代目会長として清山哲郎先生にバトンタッチされ、事務局の移転が考えられました。しかし当時(1982年秋~1984年)は会誌の発行の費用にも事欠く状態であったから移転はしばらくおあずけになりました。ようやく1986年に入って会長と庶務理事、筆者らは事務所さがしを始め、最終的にこの年の6月現在地の本郷2丁目に移転先が決まりました。これはエヌ・ティ・エスの吉田隆氏の紹介によるもので木屋ビルとちがって駅にも近く、スペースの点でも格段によくなりました。清山会長の英断であり、以後、学会は発展の道を歩むことになります。ただ、各種の事業が拡大し、盛会になればなるほど庶務の仕事は増大し、大角さんは多くのアルバイトを雇ってその場その場をしのぐ状態がしばらく続きました。1991年3月大角さんの退職に伴い、ここに、和浪ひさよ、ト部泉さんの2人の女性常勤職員を雇うことになりました。会誌編集事務はその前年の7月よりエヌ・ティ・エス社に移っておりましたのでスペース的にも余裕ができました。(この間、編集は宇宿、岩崎、星野さんが担当。詳しくは会誌Vol.12, No.7, p.471参照)。

かくしてこれまで学会運営のカナメが確立し、新体制(2人体制)ができ上がりました。当時の坂田会長と筆者(副会長)は喜びと共に安堵しました。しかし、それもつかの間で、上の2人およびその後の白井郁子さんを含め、2年ほどの勤務で相ついで退職しました。その間、菅野会長、馬場副会長らの努力により、給与規約、就業規則などが整備されました。その後、一昨年より岡田寛子さん(故岡田正和理事・広大教授夫人)が事務局に入られ、新たに北川佳子さんが岡田さんを補佐され現在に至っております。

事務局の2人体制が定着するに伴い、関西支部(1991年設立)、中部支部(1992年)、および東北支部(1994年)など支部の充実が図られました。また、会員の種類も初期に比べて維持会員、功労会員などが新たに追加され、さらに、本年度より、学会賞、功労賞、技術賞などの追加による表彰制度の充実化など本学会もますます発展の道をたどっております。

しかし、一方、このような発展は事務局の仕事量を増加させることになります。

また、15周年記念事業委員会、国際シンポジウム組織委員会、研究会委員会等々の委員会が新たに設けられ、事務局の仕事量はさらに増加することが考えられます。

本学会が国や社会にこれまでどの程度貢献したかは不明ですが、「少なからず」と自負してもよいのではないのでしょうか。しかし、いまだ国や公共団体からの補助はなく、不思議といえば不思議であります。学会誌

編集(神田さん、橋木さん;1991年より三田出版に会誌の編集,制作を委託,現在に至る)を含めた学術の普及や連絡に携わる尊い人達への給与の一部補助など,国へ

のPRが今後必要と思われます。同時に,各委員会では自主的にアルバイトを雇って肩替りさせて事務局に過重な負担をかけないように気配りたいものです。

「表面科学」誌の新しい表紙について

編集委員会表紙改訂委員会

編集委員会では表紙のデザインを変えてはどうかという意見が以前から引き継ぎ事項として伝えられてきました。創刊以来の表紙は伝え聞くところによると,初代会長の故上田隆三先生の御命嬢によるデザインであるという。どこか「Surface Science」誌を思い起こさせる立派な表紙である。そこで表紙を変えるべきかどうかを調査し,変えるならば15周年を記念して,16巻1号から始めようということになり,急遽アンケート調査を始めました。本来ならば会員全員からご意見をいただくべきであったが,時間の都合上,理事,評議員,編集委員に限らせてもらいました。多数の貴重なご意見をいただいた結果,表紙のデザインを変更したほうが良いということになりました。デザインの募集方法も種々検討しましたが,時間と資金の都合上編集委員会の表紙改訂委員会委員の力作から,委員長および副委員長の独断で長谷川修司氏(東大理)の作品に決めさせていただきました(デザインの意味については氏の文章参照)。意にそえませんでした方々,ご協力ありがとうございました。さて,色についてはこれまでの表紙の色を引き継ごうということで,ブルー系統にし,色調は若い編集委員の圧倒的な支持で,かなり明るいものとなりました。この新しい表紙が「表面科学」誌のさらなる飛躍の第1ページとなることを期待したいものです。

(福田安生)

読者のみなさんは,新しい表紙のデザインをご覧になって,何を意味しているんだろう?といぶかしがられるでしょう。でも,きっと,すぐに合点がいき,思い思いの解釈をされるに違いありません。ある人は,市松模様のは,各種の表面超構造を表わしているのでは,と想像されるかもしれません。そうすると,ひときわ目立つ赤い平面は,さしずめシリコンの7倍構造でも象徴しているのでしょう。別な人は,平行な平面の列は,結晶の原子面の積み重ねをデザイン化したものに違いない,と考えるでしょう。それは,きっとエビタキシーや超格子に関心をもたれている読者でしょう。そうすると赤い平面はδドーピングされた原子層をイメージさせます。また,電子回折を使っている方は,平行な平面の列は,平面波の伝搬を表わすものだと解釈するかもしれません。あるいはもっと抽象的に,このデザインは表面科学研究の進展の流れを表わしており,各平面は時代を画した発明・発見を象徴している,とも解釈できます。そのときには,赤い平面はきっとSTMの発明を表わしているでしょう。…こんな思いを込めてデザインしてみました,読者のみなさんのなかで他の解釈をされた方がいましたら,ぜひご一報ください。

(長谷川修司)